

【調査報告】

山間地で使用されるからさお

磯本 宏紀

一 はじめに

本稿は、現在進行中のプロジェクトである四国民具研究会の「四国のからさお」調査とリンクするものであり、資料や調査データの共同利用という点で協力を進めていくことを前提に執筆した。ただ、徳島県域を中心とした地域文化研究として、とくに民具における形態調査は十分に検討されてこなかった視点である。焼畑慣行、雑穀文化論などを主眼とした調査が進められてきた経緯の中で、いくつもの民具といっしょにからさおも提示されてきた¹⁾。そうした調査研究は重要なものであり、示唆に富むものはあるが、広域に展開する特定の民俗・民具資料から情報を読みとり、積極的に論じていこうという立場ではない。本稿ではからさおを取り上げたが、からさおそのものを明らかにすることが目的ではない。からさおは農作業の形態、脱穀作業の様式、農具の流通形態、樹木の採集などさまざまな局面で活用できる資料である。その資料から生活史ないし地域文化を読み取ることが目的である。本稿はそのために若干の資料提示の役割を担うことができればと考えている。

本稿において提示することのできる資料は、調査する機会のあった木頭

村出原、東祖谷山村京上、美郷村月野、同村大野、高開を中心とする各地区で使用される、あるいは使用されてきたからさおである。いずれも二〇〇三年八月から一二月にかけて各地の民俗資料館で収蔵されている資料、および現在所有者宅で使用しているからさおを調査したものである。

なお、研究者間での共通理解を目的として便宜上設定される標準名について、いくつかの議論がある²⁾。本稿では、読者にとって最も共通理解の得やすいと思われる平仮名表記の「からさお」で統一し、すでに前文でも記しているように、文中での仮名文字の煩雑さを解消するために傍線を付すこととする。一方、からさお使用者によるからさおの呼称を片仮名表記とする。また、からさおの部位名称は、使用者による明確な呼称も確認できないため、本稿では次のように統一する。使用対象となる作物に直接当たり、作用する部位を「打撃部」、使用者が手にもち力を加える部位を「柄」、³⁾「打撃部」と「柄」を連結し回転させるための支点の役割をする部位を「軸」とする。

二 木頭村でのからさお調査

(一) 調査概要

二〇〇三年八月二三日、木頭村役場所蔵のからさお二点を調査する機会を得たので、ここで報告する。これら二点の資料は木頭村教育委員会によって収集されたもので、現在木頭村美那川キャンプ場内にある集会施設、倉庫の入ったビジターセンター内に設置されるケース内に収蔵されているものである。以前同施設内には木頭村によって展示室が設けられ、ガラスケースが数台設置されていたが、展示室を閉室した現在、その展示室は倉庫として利用され、今回調査したからさおをはじめとする収蔵資料は、そのまま展示ケース内に保管されている。

木頭村は山間地域であり、からさおの使用対象作物が平地農村地域とは異なることが予想される。また、使用環境、具体的には屋敷地内にある二ワについても平地農村地域とは異なるであろう。そのほか、木頭村は土佐方面との交通・交易関係が密であるため、徳島県北部農村地域とは違ったからさおの流通経路をもつものと想定された³⁾。以上の点からも、木頭村で使用されたからさお調査の意義は大きいと考えられる。

(二) カラサオの形態と実測値

カラサオは木頭村で聞くことのできる呼称である。木頭村域で使用されている、または使用されてきたからさおとしてここでは「カラサオ」と表記する。

なお、今回調査した二点は、ともに木頭村教育委員会保有の台帳では「カラサオ」と表記されている。調査資料は二点ではあるが、打撃部、軸ともに

明らかに異なる形態をもつものである。また実測値を取り、表2で示したが、その大きさ、形態は双方で大きく違う。この点について、使用状況を直接の利用者から確認しなかったが、両資料ともに寄贈者＝利用者からの直接の聞き取りはすでにできなくなっている。

カラサオの形態に関する調査を進めるために、両資料についての実測を試みた。実測の際、注目した数値を表2に示した⁴⁾。中でも打撃部の長さ⁵⁾と柄の長さの関係には注目する。計測値とは異なる視点からもからさおの形態分類が提示されている。小野重朗は『南日本の民俗文化 生活と民具』の中では打撃部と軸との連結に注目して、「数本回転型」「二本回転型」「数本垂下型」「一本垂下型」の四分類を示す。これは打撃部の形態と、打撃部と軸との接合方法に着目した分類であり、打撃部が一本の材であるか、数本の結束によるものか、打撃部が軸によって接合され、回転するようにつくられているか、それとも藁などで柄と直接結びつけられている垂下型かという分類である。この分類に従うならば、No.1のカラサオは一本垂下型であり、No.2のカラサオは数本回転型の形態をとる。

打撃部と柄のそれぞれの長さに着目すると、No.1では柄に対する打撃部の比は七一・〇パーセントであるのに対し、No.2の数本回転型のものだと四七・七パーセント（小数点二位以下は切り捨て）となる。材質はNo.1の打撃部がサルスベリ、柄がスギ、No.2の打撃部が鉄、柄がカシである。その重量差は打撃部の材質によって大きな差が生じることになる。

ところで、打撃部が木から鉄に変化したという話を聞くことができた。木頭村周辺域では第二次大戦前には打撃部が木のものを使っていたが、戦後になって鉄のものが次第に普及してきたという話だった。同様の例として、岡山県において打撃部が木から鉄に変化したという指摘もある⁶⁾。

(三) カラサオの使用実態

『木頭村誌』には、カラサオをはじめとする脱穀・脱粒農具に関する記述がある。「本村における明治二〇年以前にすでに使用されていた農機具」として、脱穀・脱粒用の農具は、「カラサオ・打ちギネ・ヨコツチ」が記載される。これ以外に多くは本文中には「カラサオ」等の使用実態や使用方法についての記述はないが、表一では、当時の農具価格表がわかる。価格に関しては「カラサオ」は空欄になっている。他の農具には価格が記載されているのに対し、「横槌」「打ギネ」「カラサオ」は記載がない。「木頭村誌編集委員会 一九六一 五二〇～五二二」。このことから、木頭村ではほかの流通民具に対して、大正初期の段階では自作の民具であったことが予想される。ところで、価格無記載の他の二点はそれぞれ「横槌（稲の穂を打つ）」「打ちギネ（麦の穂を打つ）」と記載されるが、「カラサオ」の役割は表一からでは読みとれない。この木頭村のカラサオ使用作物が、稲なのか、麦なのか、その両方なのか、またそのほかの作物に対して使用されたのか、この記載からは不明である。

聞き取り調査では、木頭におけるカラサオ使用はNo.1の形態のものが多

表1 農機具調査（大正4年）

名称	価格 (円・銭)
スキ	1.20
馬鋏	1.00
エブリ	15
田植定規（1間）	20
八反取り	25
田打車	1.00
振馬鋏	35
唐臼	4.58
唐箕	8.00
援無籠	15
手箕	60
土箕	15
稲コキ（カナバシ）	2.50
麦コキ（カナバシ）	1.50
ケンド	40
マカゴ	30
メカゴ	25
メフリ	70
ライダイ（オイコ）	40
モッコ	30
フゴ（フグツ）	80
ムシロ	20
俵	10
牛鞍	80
鎌	20
田鋏（ハバヒロ）	55
ハセバ	55
山鋏	25
溝サラヘ（タニトリ）	50
土入機	38
熊手	35
株切	40
草カキ（カナカギ）	15
斧	1.20
柄鎌	60
ヨコビキ	80
ノコギリ	60
横槌（稲の穂を打つ）	
打ギネ（麦の穂を打つ）	
カラサオ	

（『木頭村誌』より引用）

く、No.2の形式のもの、すなわち鉄製の打撃部のものは少ないという話があった。昭和二〇年代から三〇年代にかけて打撃部が鉄製のもの、すなわちNo.2のものに変わったが、以前使っていた木製の方が軽くて使いやすかった。鉄製は重くて使いにくい、すぐに破損するなどの話があった。また、第二次大戦後にはカラサオを麦の脱穀に使用していた。そのときには、鉄製打撃部のものが多く使われていたという話もあった。

(四) 小括

木頭村出原で調査したからさおは、丸木の打撃部と柄を藁縄で連結した一本垂下型のものが標準型だったようだ。ただし、のちに打撃部が鉄製、柄が木製のカラサオが使われるようになったが、十分に普及する前にカラサオを使用しなくなった。その理由として、使用者としての解釈は、以前のカラサオの方が使いやすかったという点、麦作をしなくなりカラサオの使用頻度も減ったという共通点を見出すことができる。形態に関しては、打撃部が丸木の一木である点、棕櫚縄で柄と連結している点が特徴的であり、周辺地域との形態比較、教値比較の余地を残している。

三 東祖谷山村でのからさお調査

(一) 調査概要

祖谷地方は秘境性、落人伝説、焼畑村落などのテーマで注目されることが多かった地域であり、からさおについても何点かについては報告書に掲載されている。本稿では、それに乗せる形で資料提示を図りたい。東祖谷山村でのからさお調査は、東祖谷山村立民俗資料館所蔵資料二点について、二〇〇三年一月二五日に行った。東祖谷山村立民俗資料館では、からさおは二点とも展示資料として活用されているが、東祖谷山村教育委員会のご厚意により借用を受け調査した。また、資料台帳の閲覧もしたが、資料名「カラサオ」と資料番号が記入された台帳からは資料の出所は不明であった。そのため現在のところ、二点の資料の実測調査のみに終わっている。しかし、過去に文献上で報告されているからさおの事例もあることから、そうした事例も含めてここでまとめておく。

(二) カラサオの形態と計測値

東祖谷山村京上でのからさおの呼称は「カラサオ」と確認した。二点のカラサオを調査したが、一点は打撃部が丸単棒のツバキ科の木、柄がマグケで、打撃部が軸に固定されて柄を巻き付けて回転運動をさせるものである。もう一点はNo.2のからさお同様打撃部が鉄製のものである。ただし、柄は竹製のものであり、東祖谷山村京上の丸単棒のものと共通している。

木頭村同様カラサオの多くが、打撃部が丸単棒のものであったが、鉄製のものに変化したという話を聞いた。

次に打撃部と柄の長さの比について着目する。東祖谷山村立民俗資料館所蔵の資料の場合、打撃部と柄の長さの比、すなわち(打撃部の長さ)÷柄の長さ×100の数値が100パーセント以下、つまりが柄の方が打撃部よりも長い。しかし、徳島県郷土文化会館による調査で、「カラサオハシですごいた麦を叩いて粒にする道具。柄の方は堅い木で108・5センチ、それを振って横にとりつけられた竿(103・0センチ)を回転させて表を打つ。豆類や粟などの脱穀にも使う。」「徳島県文化会館民俗文化財集編集委員会 一九八七 二三」という内容のものでは、打撃部と柄の長さ比は105・3パーセントとなり、打撃部の長さが柄の長さよりも長いことになる。今回提示したデータの中でも特殊なものとなる。

そのほか依裕『秘境と落人の里 祖谷 図説民俗誌』にはカラサオを用いた脱穀の作業写真が二枚掲載される。カラサオの形態について、とくに作業中の写真であることから、打撃部の詳細はわからないが、少なくとも鉄製ではないようである。また、柄はすべて竹製であり、軸との連結は巻き軸方式であるように見受けられる〔依 一九九二 一五五〕。

(三) カラサオの使用実態

再び依裕『秘境と落人の里 祖谷 図説民俗誌』の写真に注目する。一枚目の写真は「そばの脱穀 昭和五〇年写」、二枚目が「穀竿でそばを脱穀 平成二年写」である。一枚目は、男女が一人ずつ向かい合って交互にカラサオを打ち下ろしている写真であり、納屋なか建物のおく脇に籾を八枚ほど敷いてソバの脱穀作業をしている。その籾の脇には作業している人

の腰の高さあたりに竹竿をわたし、そこから毛布をかけている。脱穀したソバが筵の脇に飛び散らないような工夫だろう。二枚目の写真は女性が三人、手前に一人、向こう側に二人で脱穀をしている写真である。向こう側の二人がカラサオを打ち下ろし、手前側は振りかぶっていて、対面で交互に作業を進めていることがわかる。作業場所は特定できないものの、周囲の土の状態から畑の端であるように見受けられる。こちらの写真も、両側には木板をたてて脱穀したソバの実の飛散を防いでいる。

(四) 小括

東祖谷山村立民俗資料館に所蔵されるカラサオにも二つのバリエーションがあった。しかし、これが変化してたとえば鉄製に変化したのか、それとも同時代の地域差を示す資料なのかは今回の調査では不明である。資料館収蔵資料のみで、その資料のバックグラウンドとなる情報なしでは変化を明らかにすることができない。今回の東祖谷山村の資料に関しては、資料の形態を示し、今後の調査への布石とする。

四 美郷村でのからさお調査

(一) 調査概要

美郷村は徳島県中央部、吉野川南岸の山川町、鴨島町と北接、南に木屋平村、穴吹町、東に神山町と接する地域である。傾斜地を利用した耕作が行われる地域である。

その美郷村でのからさお調査は、からさおを所有する農家を訪ね、現地で実測した。なお、美郷ほたる館、美郷村ふるさとセンターにそれぞれ民俗・民具資料が収蔵されるものの、からさおは収蔵されていない。美郷村では三点のからさおのデータを得た。いずれも、ソバ打ち、ダイズ打ち等で使用しているものであり、現在も使用目的で所有している農家が多い。なお、美郷村の各調査地でのからさおの呼称は、「カリサオ」で共通している。

(二) カリサオの形態と計測値

美郷村におけるカリサオについて、ここで提示できる資料は三点である。美郷村大野、月野、高開のそれぞれの地区で各一点ずつではあるが、形態としてはいずれも比較的近似値を示すものである。すべて打撃部がモウソウチクを縦に割ったものを四本結束した形状で、比較的粘り強い木とされるエゴノキ^①、ヒノキを使用した軸を差し込んで固定し、連結させてある。この軸のもう一方には、柄の先を熱して曲げ、巻き付けることによって連結している。

打撃部の長さは資料三点とも九〇センチ強に対し、柄の長さは二〇〇センチ強から二二二センチを越えるものがあり、これを「(打撃部の長さ)÷(柄の長さ)×一〇〇パーセント」で示すと、四〇から四五パーセントの範囲となる。これに対して、重量に関しては長さほどの大きな差は見られない。打撃部重量が七五〇から八〇〇グラム、全体で一五〇〇から一六〇〇グラム前後になる。

打撃部ほか各部位に関して、聞き取り調査ではその変化は確認できなかった。とくに、打撃部が鉄製のカリサオを使用していない。

なお、この三点に関しては、筆者らの調査「磯本 二〇〇三」で示した上板町及び徳島県立博物館所蔵資料とは、計測値、部位材質、呼称から判断して、類似の形態であると判断できる。

(三) カリサオの使用実態

美郷村でカリサオを所持している三軒は、ともに現在でもカリサオを使用している。現在主にソバの脱穀に使用している。一二月頃の収穫後、一、二週間ほど乾燥させたソバを脱穀するのに使用する。このとき、ニワに籾を広げてその上で脱穀をする。ただし、最近ソバの量も多くなく、一人で脱穀することが多い。そして、かつて収穫量が多かった頃には夫婦二人で向かい合ってカリサオを打ったという。これらの話はカリサオの使用実態として聞き取りをした話者に共通するものである。

次に、対象とした資料に関しては、すべてカリサオは自作のものを使用している。柄の長さ、打撃部の長さを設定する際にはどのようにしているのか、なぜ現状の長さになっているのか、という点について、「昔からそうしていた」「親の代からそうしていた」といった説明もあったが、表二の№8の資料所有者高開文雄氏は、「これくらい柄が長くないと振り下ろしたときに手に当たって危ないから」と解釈する。カリサオを自作するときにとくに長さを計測して決めるわけではなく、使いやすい長さで柄や打撃部に竹を切断する。その製作工程と使用状況に関する解釈が以上の発言である。また、長年使用してきた形が使いやすいとの説明もあった。

さて、言うまでもなくこの解釈では、たとえば第三章で報告した東祖谷山村で使用されていたカラサオの柄の取り付けは説明できない。柄の長さが美郷村のカリサオに対して短く、むしろ打撃部の方が長いからである。

(四) 小括

美郷村域での三点のカリサオはいずれも打撃部、柄ともに竹製であり、軸がエゴノキかヒノキであった。特徴的なのは柄の長さであり、二〇〇センチを越えるものばかりだった。呼称のカリサオ、形態の特徴から徳島県北東部、香川県東部（旧引田町域）で使用されているカリサオとの共通点が多い。ただし、それらのカリサオの明確な結びつき、たとえば伝播であるとか、流通関係といったものを見出すには至っていない。もっとも、美郷村で調査した三点に関しては自作であり、現在使用しているもので、聞き取り調査の中では近年の変化はなかったと確認している。

五 おわりに

木頭村、東祖谷山村、美郷村の三地域で使用される、または使用されていたからさおについて以上により調査結果を報告してきた。この三地域を山間地と括弧してみたが、からさおの使用状況、使用対象物、使用場所などは、いわゆる山間地などという環境的要因によって形態が決定づけられる訳ではないのは、以上であげてきた三地域の事例だけでも明白である。

地域ごとのからさおの使用と製作に関する個別の論理、つまりからさおとはかくあるべきだという種の保守的な論理がある。

その地域の論理について三地域の事例についてまとめ、同時に今後の見通しとする。

①からさおの使用、製作において柄の長さ、打撃部の長さ及び作業時の手

元にかかる重量などは身体感覚としての記憶となり、結果として類似のからさおの再生が繰り返されることになる。したがって、そうした感覚を理解するための客観的データとして、もろもろの計測値を分析することは有効であり、進めていかなければならない作業である。

②鉄製のからさおに変化した場合、その身体感覚のために変化を肯定する人は使用者には多くはない。しかし、何らかの理由で鉄製打撃部が出現し受容されたことは確かであり、現状では変化の記憶とともに打撃部が鉄製のからさおも多く残されている。

以上、事例よりまとめることのできたのがこの二点である。本稿では少なくとも三地域で使用されている、もしくは使用されていたからさおのそれぞれの代表例を資料として提示することができた。そういった面では、各資料館でのからさお形態調査からはじめた一連の調査により、当初の最低限の役割は果たせたと考えている⁽⁵⁾。

ただ、打撃部は鉄製への変化とその受容に関してはさらに検討の余地を残すし、からさおの時間差、地域差は明確にできなかった。むしろ、こうした調査を積み重ねることによって明らかになってくるものだと考える。また、その鉄製打撃部の使用のはじまりについては、ここであげた木頭村、東祖谷山村での事例では明確でない。三地域の事例より明らかなのが、形態を示す計測値としての差であり、数値そのものからの客観的分析が必要になるであろう。ある程度のデータを蓄積した上での数値分析を進めようと考えている。

こうして調査報告の中で、課題も見えてきた。今後は課題の論証にむけた資料収集の作業を進めていきたい。

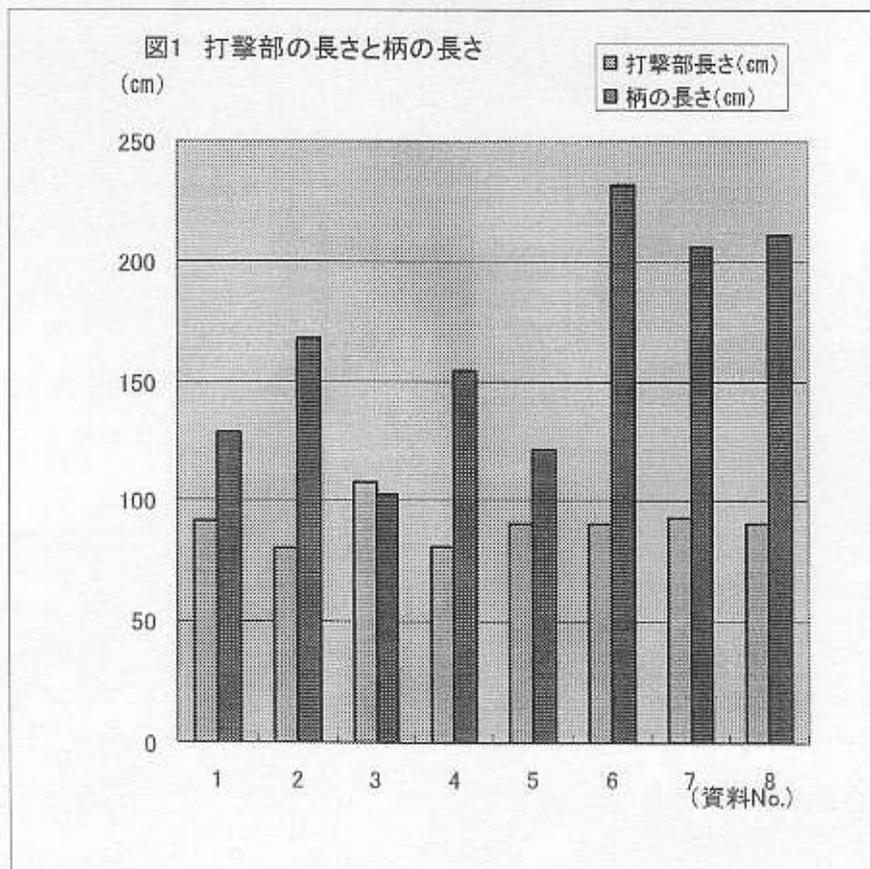
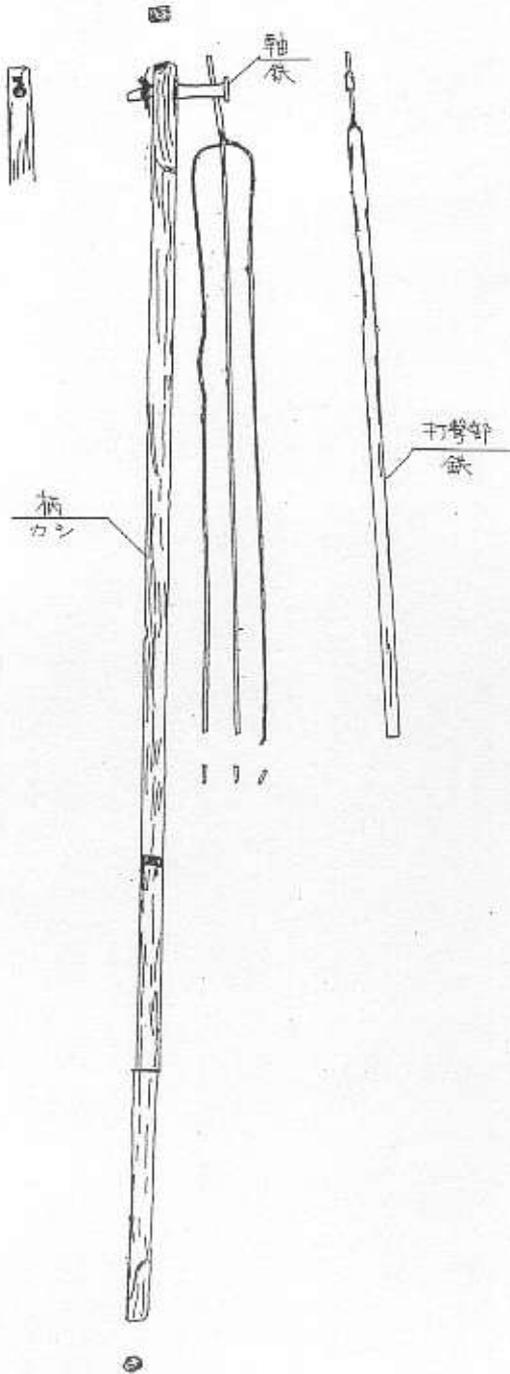


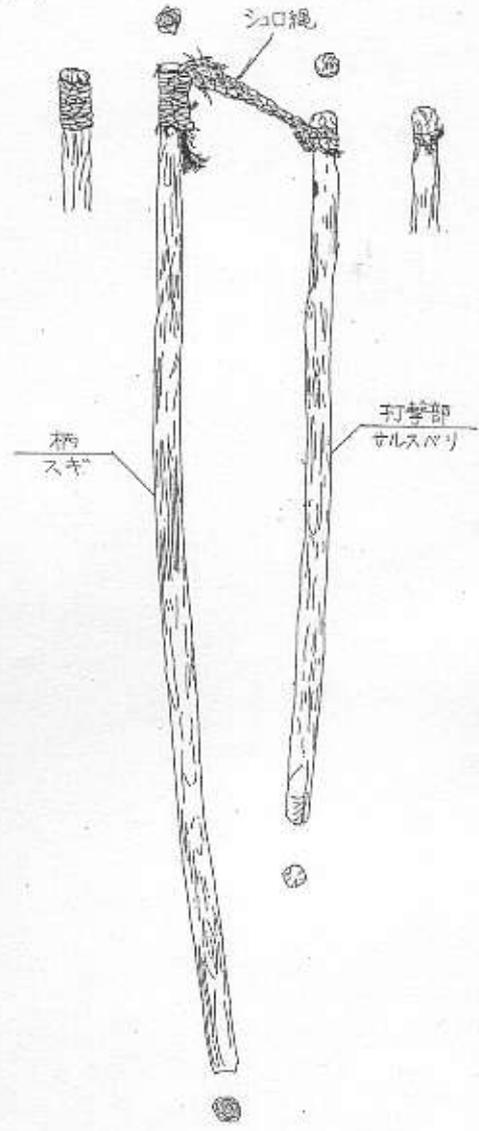
表2 からさお数値表

No.	地方名	表記	地域	打撃部長さ(cm)	打撃部幅(cm)	柄長(cm)	柄径(cm)	打撃部/柄比	軸長(cm)	軸幅(cm)	打撃部式	取り付け方	打面積(cm ²)	重量(g)	打撃部重量(g)	打撃部素材	柄素材	軸材質	対象	使用者名	所蔵	備考
1	カラサオ	カラ竿	木頭村 和無田	91.8	3.1	129.3	4.2	71.0	17.1	3.2以内	丸単棒	垂下型	91.8*3.1以下	未測定	未測定	サルスベリ	スギ	シエロ細		藤田美野	木頭村役場 No.305	磯本宏紀 2003.8.23
2	カラサオ	カラ竿	木頭村	80.1	0.2	167.9	3.0	47.7	11.8	1.3	鉄縦糸3連	差込	80.1*0.2*3以下	2100	測定不能	鉄	カン	鉄		福井義市	木頭村役場 No.304	磯本宏紀 2003.8.23
3	カラサオ	カラサオ		108.5		103.0		105.3			角単棒	巻き軸				木	竹	木	ムギ、ダイズ、ソバ			「祖谷の民俗」23頁
4	カラサオ	唐竿	東祖谷 山村	81.3	2.5~4.3	154.5	3.0~4.2	52.6	26.3	3.0~3.7	丸単棒	巻き軸	76.2*4.3以下	1320	680	木(ソバキ科?)	マダケ	カン		不明	東祖谷山村立 民俗資料館 No.85-1	磯本宏紀 2003.11.25
5	カラサオ	唐竿	東祖谷 山村	90.5	1.4~6.6	122.1	2.8~4.6	74.1	23.2	4.0~5.6	鉄縦糸3連	巻き軸	81.0*6.6以下	2030	1640	鉄	マダケ	カン		不明	東祖谷山村立 民俗資料館 No.85-2	磯本宏紀 2003.11.25
6	カリサオ		美郷村 大野	91.0	4.0~6.5	231.5	4.5	39.3	17.5	4.0~5.0	竹重四連	巻き軸		1510	750	モウソウ	ハチク	エゴノキ (チヨウメソ)	ソバ、アズキ、ムギ	丸尾健氏	丸尾健氏	磯本宏紀 2003.12.1
7	カリサオ		美郷村 月野	93.5	4.0~12.1	206.0	3.2	45.4	20.6	6.0	竹重四連	巻き軸		1650	800	モウソウ	ハチク	ヒノキ	ソバ、アズキ、ムギ	後藤田辰雄氏 S.2生	後藤田辰雄氏	磯本宏紀 2003.10.30
8	カリサオ		美郷村 高開	90.5	4.0~6.5	211.0	4.0	42.9	18.5	4.0~5.5	竹重四連	巻き軸	90.5*6.5以下	1550	800	モウソウ	ハチク	エゴノキ (チヨウメソ)	ソバ	高開文雄氏 S.8生	高開文雄氏	磯本宏紀 2003.10.13

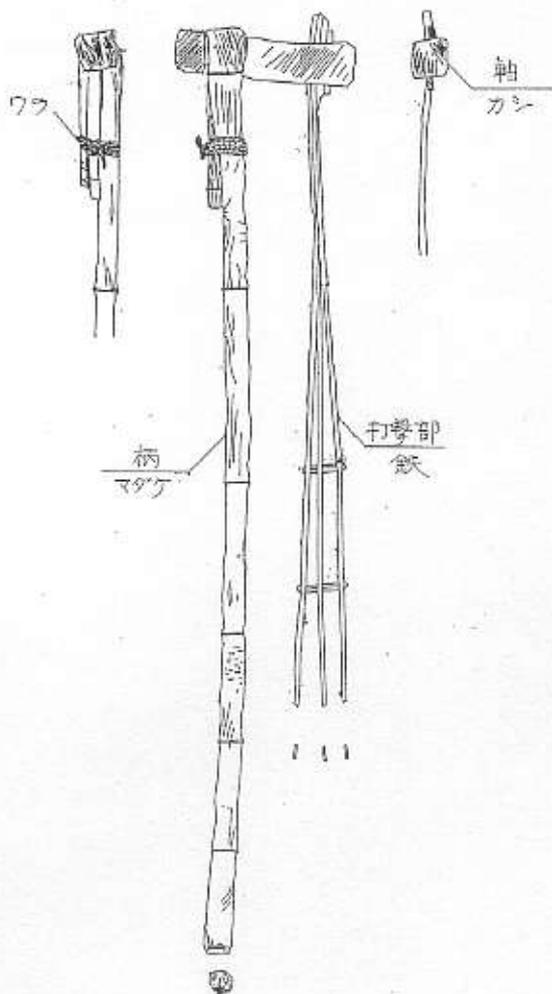
NO2



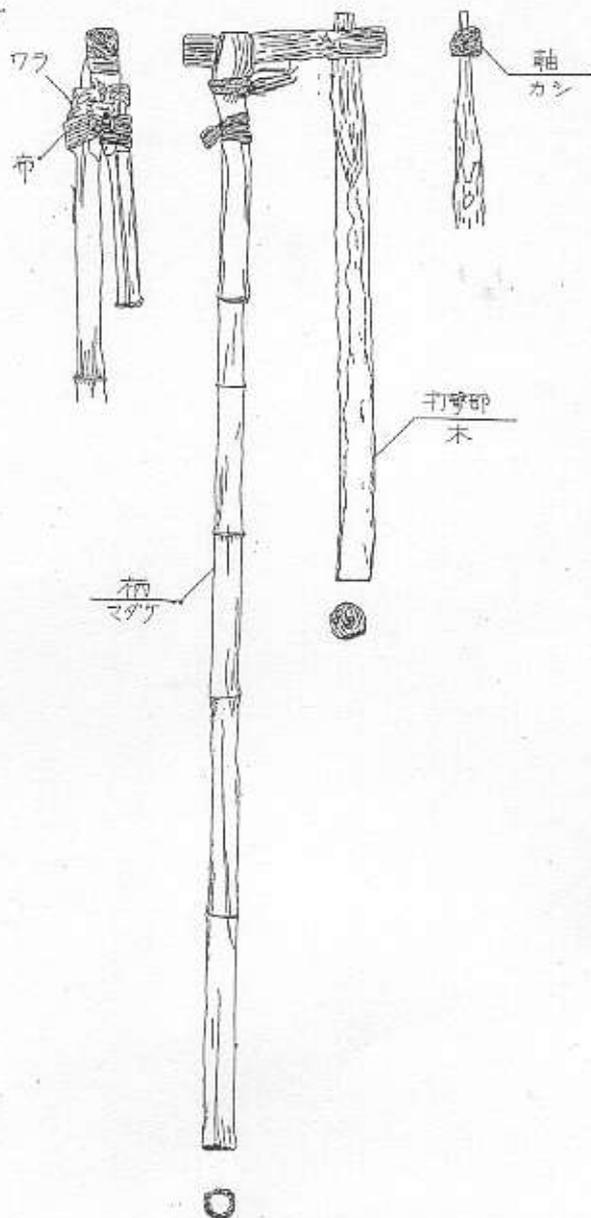
NO1



NO5



NO4



(1) たとえば、一点カラサオの写真が掲載され、「カラサオ ハシです」といた麦を叩いて粒にする道具。柄の方は堅い木で一〇八・五センチ、それを振って横にとりつけられた竿（二〇三・〇センチ）を回転させて麦を打つ。豆類や粟などの脱穀にも使う。「徳島県文化会館民俗文化財集編委員会 一九八七 二二三」と記載される。また、「俵 一九九三」でも最近の写真が掲載され、作業風景を示している。

(2) たとえば、「織野英史 一九九六」での議論にもあるが、「唐竿（唐棹）」「連枷」のどちらかを標準名に設定すべきだということになるが、実際に一部の地域では呼称としても使用されるために共通理解の得やすいと考えられる、「からさお」をここでは標準名として便宜上使用した。

(3) 磯本宏紀 二〇〇三 「カリサオ考―徳島県板野郡上板町での連枷調査より―」『民具集積』八の中で、上板町における大正期のカリサオは、徳島佐古方面からの行商人が農具市に持ち込んだカリサオを購入したという流通事例に関する若干の指摘をしている。ちなみに、「カリサオ」は徳島県北東部の吉野川流域から香川県東かがわ市の旧引田町域で確認されているからさおの地方名である。

(4) すでに関東民具研究会編 一九八九 『南関東のクルリ棒』に掲載された実測図でも柄の径、長さ、打撃部の径、長さ、軸部の径、長さなどの実測値が示されているが、具体的な形で「計測表」が示されたのは織野英史 一九九九 「連枷調査概論―四国の中からさお調査要綱」であろう。本稿ではそれに基づいて作成した「磯本 二〇〇三」で作成した計測表と同じ項目を使用した。

(5) 「鶴藤 一九七二 四三三」にこうした記載がある。

(6) この「カリサオ」という呼称は、筆者による上板町での調査「磯本 二〇〇三」や、六車功氏が旧引田町域の一部で確認された「カリサオ」という呼称と一致する「六車 二〇〇三」。

(7) 聞き取り調査の際には「チョウメン」という地方名で聞いたが、和名ではエゴノキを指す。なお、チョウメンという呼称は同じエゴノキに対しても、上板町、藍住町の一部においても聞き取りをしている。

(8) もっとも、からさおを自作する場合には周囲の植生の制約を受けることになる。からさおの打撃部、柄、軸に使用する材は「近くの山」で採集するためである。

(9) 博物館、資料館に収蔵されている資料は、収集者の、収集時における一定の意図のもとに収集されたものであり、そこに収蔵されているからといって即その地域の代表例とはいえない。必ずそれを補充する資料が必要である。また、変化を示す資料であっても、資料の背景にある情報なしでの収蔵資料は、収蔵庫という空間において、その時間差が失われ、資料本来の意味が失われる危険性もある。

参考文献

- 磯本宏紀 二〇〇三 「カリサオ考―徳島県板野郡上板町での連枷調査より―」『民具集積』八
- 小野重朗 一九九三 「南九州の技術と民俗点描」『小野重朗著作集 南日本の民俗文化三 生活と民具』第一書房
- 織野英史 一九九六 「恣意的呼称選択―學術用語としての民具呼称の恣意性」『日本民俗学』二〇七
- 織野英史 一九九九 「連枷調査論―四国の中からさお調査要綱」『民具

集積』五

関東民具研究会編 一九八九 『南関東のクルリ棒』 関東民具研究会

木頭村誌編集委員会編 一九六一 『木頭村誌』 木頭村

依裕 一九九三 『秘境と落人の里 祖谷 図説民俗誌』 徳島県出版文

化協会

徳島県郷土文化会館民俗文化財集編集委員会編 一九八七 『祖谷の民俗』

徳島県郷土文化会館

鶴藤鹿忠 一九七二 『岡山の民具』 日本文教出版

高山豊 一九九七 『連柳感想―結束型のことなど他』 『民具集積』三

六車功 二〇〇三 『香川県東部の連柳について―旧大川郡の調査事例』

『民具集積』九

(二七七〇―八〇七〇 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館)